旅・いろいろ地球人

「海洋考古学の世界」　小野林太郎（国立民族学博物館准教授）

（1）石垣島の海底遺跡　2020 年 10 月 3 日刊行

海洋考古学と聞いて何をイメージされるだろうか。たとえば海底遺跡や沈没船。これらはもちろん、海洋考古学の対象だ。だがそれだけではない。海洋考古学は、海と人類の歴史を探求する学問。海中だけでなく、島や沿岸域に残されたさまざまな遺跡がそのフィールドとなる。ここでは国内外におけるその多様な研究現場や遺跡を紹介したい。

サンゴ礁が発達する沖縄は、日本における海底遺跡の宝庫である。石垣島にも海底遺跡が存在する。その多くは台風などで難破し、浅いサンゴ礁に座礁した船やその積み荷からなる遺跡群だ。2012 年から調査してきた屋良部沖海底遺跡もそんな遺跡だった。水深 20～30 メートルの海底に七つの鉄製四爪錨（よつめいかり）や沖縄産の近世陶器壺が多数発見され、沈没船も眠る可能性が出てきた遺跡である。

とくに興味深いのは四爪錨。九州以南では江戸時代における代表的な錨だが、沖縄で発見されたのはこの屋良部沖が初となった。では一体、その持ち主は誰か。まず四爪錨を搭載していた中国船、薩摩船が候補となったが、石垣島は両者の航海ルートの外。一方、陶器壺の存在は琉球船の可能性を示唆するが、四爪錨が琉球船に搭載された記録はなし。研究もここで暗礁に乗り上げた。発見が新たな謎を生むのは常だが、次回はこの四爪錨の謎に迫りたい。

屋良部沖海底遺跡の四爪錨を調査。東海大開発の水中ロボットも活躍した。＝沖縄・石垣島で 2012 年、山本遊児氏撮影

（2）四爪錨の謎と魅力　2020 年 10 月 10 日刊行

石垣島の屋良部沖海底遺跡で見つかった七つの四爪錨（よつめいかり）。その謎を追って暗礁に乗り上げた私たちが目を付けたのは、博物館に所蔵されていた近世期の絵図だった。当時の那覇港や行き来するさまざまな船を描いたものも多く、描写も詳細だ。その中から、ついに四爪錨を搭載している進貢船を発見したのである。

古文書の調査からも、1685 年に台風により屋良部沖で遭難した進貢船があったことが判明する。石垣島は進貢船による航海ルートの外だが、難破したのであれば話は別だ。これらの発見から四爪錨は、やはり琉球船によって運ばれた可能性が高くなってきた。このように海洋考古学の対象は海中だけでなく、博物館なども重要なフィールドとなる。

錨と壺だけが見つかった海底遺跡。一見、地味である。しかし、そこに秘められた歴史的ロマンは一般の人々をも魅了するのではないか。そんな思いから、まずは地元のダイバーたちにその魅力や遺跡見学のポイントを伝える講習会を毎年開催してきた。石垣島はダイビング観光の名所。近年では講習を受けたダイバーたちが、一般ダイバーを伴って遺跡見学し、同時に遺跡の状況チェックも担いだしてくれている。沈没船そのものはまだ見つかっていないが、海底遺跡の持つ文化遺産としての魅力は計り知れない。

屋良部沖海底遺跡で最も大きい 6 号四爪錨＝沖縄・石垣島で 2012 年、山本遊児氏撮影

（3）トケラウ―環礁での発掘　2020 年 10 月 17 日刊行

ポリネシアのトケラウ諸島を知っている方はそう多くないだろう。温暖化と海面上昇により沈没の危機にあるツバルの隣にある環礁島群だ。ツバルと同じく海抜約 2 メートルの環礁島である点も共通する。ただツバルが独立国家であるのに対し、トケラウは距離的には離れているものの、ニュージーランド領の島々。そのせいかツバルと同じ状況ながら、世界的な注目度はまだ低い。

サンゴ礁がドーナツ型に形成されて生まれる環礁島は、その低さや限られえた土壌ゆえ海面変動だけでなく、サイクロンや干ばつの影響を受けやすい極めて脆弱な環境を持つ。そんな島々になぜ人類は移住し、また継続して生存できたのか。そのような問いからアメリカ人の考古学者らと発掘を計画。2009 年の夏、サモアから帆船で 3 日間波に揺られ、トケラウのアタフ環礁に着いた。

ここで約 1 ヶ月に渡り、発掘や漁労活動の調査を行った。島民にとって重要なタンパク源となる海産物がどのように捕獲・利用され、現在に至るかを調べていった。その結果、島の人々が少なくとも 500 年以上にわたって、持続的に外洋からラグーン（礁湖）にいたるさまざまな海産資源を利用していたことが明らかになった。こうした島に暮らす人類による生活史の復元も、海洋考古学の重要なテーマの一つである。

アタフ環礁とラグーンの風景。手前は出土遺物を選別する筆者。＝トケラウ諸島で 2009 年、デビッド・アディソン博士撮影

（4）ポンペイ島の謎を追う　2020 年 10 月 24 日刊行

ポンペイ島は東ミクロネシアで最大面積を誇る火山島だ。この島の南東岸の海域に、2016 年に世界遺産に登録されたナンマトル遺跡がある。遺跡は海上に浮かぶ約 100 の人工島からなる。いずれもサンゴ石と玄武岩を利用した巨石建造物で、かつてこの島に生まれた二つの王朝の中心地だったとの伝説が残る。

その最盛期は 13～15 世紀ごろ。数ある人口島のうち、最大級となるナントワス島には歴代の王たちが葬られたとされる石室があり、島は柱状玄武岩による二重の壁を持つ。その外周壁の高さは 9 メートルを誇り、屹立する姿はまさに荘厳である。しかし謎も多く、ナンマトルの建造が始まった時期はまだ特定できていない。

同じく議論が続いているのが、ポンペイ島への人類の最初の移住期やその起源地について。そこでこれらの謎に迫るため、昨年からポンペイ島に隣接するレンゲル島にて発掘を開始した。レンゲル島はかつて日本軍の基地としても利用された島で、戦跡も多い。私たちの発掘区域も旧兵舎の隣に位置する沿岸域で、目前はリーフ（礁）である。その深度約 1 メートルの白砂層からは多くの土器片や貝製品が出土した。年代測定の結果、現時点では最古の 2000 年前ごろまで遡りそうだ。今後の調査で、ポンペイ島をめぐる人類史や巨石文化の謎に迫っていきたい。

ナンマトル遺跡最大の人工島「ナントワス」
＝ポンペイ島で 2014 年、片岡修氏撮影

Ⓒ 国立民族学博物館 DiPLAS 事業

（5）海を越えたサピエンス　2020 年 10 月 31 日刊行

インドネシアのスラウェシ島は 5 万年前の氷期の時代も島だった。海面が最大で 150 メートルも低くなった当時、隣のボルネオ島やジャワ島はアジア大陸と陸橋で繋がり、陸路での移住が可能だった。しかしスラウェシ島を含む東インドネシアの島々に人類が移住するには、どうしても海を渡る必要があった。

一方、その先にあるオーストラリア大陸には約 5 万年前までには私たち現生人類＝サピエンスが初の移住に成功した痕跡が見つかっている。オーストラリアへの移住にも長距離航海が必要となるが、サピエンスの起源地がアフリカの場合、スラウェシ島への渡海と移住がより先行していたことになる。では一体いつごろ、私たちの祖先は海を越え、スラウェシ島に辿り着いたのか。またどんな暮らしをしていたのだろうか。

スラウェシではまだ 5 万年を超えるサピエンスの遺跡が発見されていないが、近年では 4 万年前という世界最古の壁画も発見された。私も 2016 年より東部沿岸のトポガロ遺跡という大きな洞窟群にて発掘を始め、昨年ついに 4 万年前の層に辿り着いた。堆積はまだ深く、さらに古い人類の痕跡も期待できる。残念ながらコロナ禍で今年の調査は中断となったが、海を越えたサピエンスの新たな痕跡を探す海洋考古学の冒険はここからが正念場と考えている。

4 万年前の人類痕跡が残るトポガロ洞窟の遺跡での調査風景＝インドネシアで 2017 年、筆者撮影